第六講《小説その２》母親と子供の対比

次の文章は、島尾敏雄の小説『砂嘴(さし)の丘にて』の一節である。「私」の母の話では、かつて折笠先生は、すでに夫もあり二人の赤ん坊まである母に結婚を申し込んだことがあり、それは不調に終わったという。その後、毎年先生から季節の品の贈り物が届けられたりしていた。これを読んで、後の問いに答えよ。

私が始めて折笠先生という人に会ったのは暑中休暇でいつものように私たちが、「いなか」に帰っていた時のことだ。私は(注)尋常科の一年生だったように思う。その年のいなかへは私と上の妹の二人だけが行くことになった。そして母は、いなかに居る間のいつか一日を折笠先生の所に遊びに行くことを私たちに約束させた。

ある日、私と妹は祖母に連れられて、折笠先生の家を尋ねた。

その時の私は、母の疑いのない口ぶりに支えられていた。だが気はすすまなかった。その場合むしろ祖母の方から積極的に私たちは連れ出された。何かの縁故から祖母は折笠先生の人柄について、聞き知る所があって、心を動かしていたような所があった。祖母は、私の母と折笠先生とのいきさつよりはむしろ、折笠先生の家が、太平洋の浜辺寄りのその地方での昔からの古い家の一つで、彼の伯母のかねという人と、若い頃(ころ)にかなり親しいつき合いをしたことに、なつかしさをあおられたようであった。その人はもう大分前に死んでいたが、祖母はおかねさんの実家の様子と、その甥(おい)であるという折笠先生を一度見て置きたいと思ったようだ。

祖母と私と妹とは、私たちのいなかの駅から二つか三つ目の駅で汽車を下り、駅前から小さな町中を通り抜け、町外れの踏切を渡ると、見渡す限りの田圃(たんぼ)のある風景の中で、下駄(げた)の底に吸いつきそうな砂ぼこりの白っぽい県道が、乾き上がって行く手の森かげの方に伸びているのを見た。

A<u>私たちはその白い道を乾ききって歩いて行った。</u>

夏休みで、いなかに帰っている間は、概(おおむ)ね私は自由な思いをしたが、然(しか)しどうしても果たさなければならない義務が二つか三つかは負わされていた。例えば父の方のおじやおばたちの家々を回らなければならないこと。私はそれがあんなに自分にとっ

て嫌悪されていたことが滑稽なことに思い返される。B私がその嫌悪の様子を露骨にしてみせる程、祖母や、そして母も、私をたしなめながら喜ぶことを私は知っていた。私は折笠先生の訪問もその年の夏休みのいやなおつとめの一つに数え挙げていた。

私と妹は、よそ行きの洋服を着なければならなかった。それは特別にそういう日のために都会の母から用意されていたもので、祖母は私たちにそれを着ることを強く要求した。然し、私はそれを着ることを好まなかった。はでな縞模様の(注)羽二重地のシャツ、そして妹は同じ生地のぞろりとしたワンピース。明らかに一つの反物から分けて作ったことが歴然としていて、そのようなはでな服装を、私たちのいなかでは殆ど見ることが出来ない。その為に私たちは、いなかの子供たちの揶揄の的になったものだ。そのよそ行きを着ている時の私と妹は、広い道や町筋をさけて、人のいない鉄道線路や田圃道を選ばなければならなかった。その日は祖母がついていたので、いくらか肩身のせまい思いをなくすことが出来たが、見馴れた妹の都会くさい、羽二重地のワンピースや眼元深くかぶる帽子などの恰好が、いつものことながらCもう少しどうにかならないものかと思っていた。私は自分の妹を醜いと思い、そのいくらか大人びて見える切れ目の長い眼許や、口許の勝気そうに引きしまったあんばいの美しさに気付くことが出来なかった。彼女のえくぼさえ私は醜く思った。彼女の気安げな大胆さを低能のせいにしていた。子供の私は、彼女がいつまでも私の為には荷厄介な付属物のように此の世の中にあって私の傍にくっついて邪魔をしているように思っていた。

どんなに長い白い道を歩いたことだったろう。その長い道の途中には氷水屋もラムネ屋も見つけることが出来なかった。そして私たちは再び負わなければならない帰途のその苦労にうんざりした気持ちで折笠先生の家に辿りついた。

折笠先生は中学校の教師をしていた。それで私たちは、彼を先生と呼んでいたのだが、丁度折悪しくその日先生は学校の慰安会で、夜遅くしか帰って来ないということであった。

その日私は折笠先生の家のたたずまいから、或る深く打たれるものを感じた。不幸な静けさのようなものが、彼の屋敷うち一ぱいにみなぎっていた。その屋敷は白い街道筋から坂道の誘道で引きこまれた小高い所に、よく手入れのとどいた丈高の生垣ですっかり囲まれていたが、そこにだけ通ずる細い坂道を登って行く時に、既に訪問者に一種名状しがたい憂愁の感情が、起こって来るようであった。

その日の訪問の印象が、こんなにいつまでも私の心に焼きついているということは恐ろしいことだ。西も東も分からない年頃の私が、そのときの印象だけで、或る型の家のたたずまいと、或る型の人間の気配とについて、固定観念のようなものが出来上

がってしまった。

　こまかなことは忘れたが、ただ二つのことが記憶にあざやかだ。それはその屋敷には蠅がいなかったこと。その夜は折笠先生の帰宅が遅くて私たちは先生の奥さんに強く引き留められて泊まったのだが、夜中に私は強いおとなの体臭に眼を覚ましたこと。彼は宴会で酒に酔っていた。おかしなことだが、それは私の期待に合致したのだ。私の母のこしらえごとで折笠先生は不幸な人でなければならなかった。彼は生ける屍のような毎日を鄙びたいなかの旧家で、希望を断ち、運命への消極的な復讐の生活を送っている筈であった。それで彼が泥酔して帰って来たことは、いかにも似つかわしいことに思われた。やっぱりそうだったのだ。私は熟柿臭い折笠先生に違いない人に抱き上げられたのを知っていたが、何か未知の人への恐怖と、寝ている所を酔っ払いの騒々しさで眠りから引き戻された不快と、私が折笠先生を考える時につきまとっている或る気分の為の羞恥とで、瞼のうらをわななかせつつ眠りを装っていた。

「………」

　折笠先生がその妻に何か言った言葉に、又私は恥ずかしい思いをした。それは何か子供である私の無心な美しさのようなことに対する彼の詠嘆の言葉であったようだ。然し実際は私は狸寝をしていて、眼を覚まして彼と初対面の挨拶をすることが億劫な気持ちと、おとなが子供の私に抱いている感じを崩してしまっては悪いだろうという心遣いで、殊更に身体をぐったりさせ、しばらくは、彼の毛むくじゃらの、と感じた腕の中で、見透かされはしないだろうかというおののきと闘っていた。それにしても、折笠先生の奥さんは、何という可哀そうな人なのだろうとその時の私は思ったのだ。

「あなた、起こしてしまいますよ。そんなに……」

　その言葉からは、何かしら世間というものからの私に対する批評に似たものをかぎつけてみるだけで、折笠先生とその妻との毎日の生活のどんなかげりもひき出すことは出来なかった。

　あわただしく小さな嵐が過ぎ去ってしまったように、いつのまにか私は再び眠りの中に陥ち込んでいた。

　翌朝眼をさましてからの、私のちぐはぐな気持ちを調整する為の努力は、私を一層無口にし、おしゃまなものに見せかけていたであろう。あれ、こんな人だったのかしらん。顔のひげが美しく剃られて青く見える。血色のいい顔の人。眼が象のそれのように細くてやさしく何処にも荒廃の気配など見えはしない。昨夜お酒を飲んで来た不幸な人の面影など、何処にも留めてはいな

い。そして奥さんとのおだやかな応対。

私ははぐらかされていた。だから一層完全に振る舞おうとして、私は折笠先生が大事にしていたレコードをふみ割ったりした。私はすると彼は、私の戸惑いするすきも与えずに、こわれたレコードの残骸（ざんがい）を私の見えない所にあわてて押し込んでしまった。私は自分の勘定の彼からの借り方がふくらんで来るように思った。然し救済されている感じを植えつけられたことも事実だ。

（注）匡子（まさこ）はまだ小さかった。一言ものを言わない子。私は彼女を美しいとは思えなかった。彼女が私に美しく見えれば、私の小さな世の中がふくらんでくる期待が持てたのに、私に彼女の美しさは見えなかった。口もとのとがって見えたのが、私がいつも厄介で美しくないものに感じている私の上の妹の、ひねくれの気性に似ていると思い、失望した。頬（ほお）の赤いのは、いなかっぺいだと思えた。

私の母がこしらえあげた物語めいた生活など、此の世の中にありはしなかった。私はそういう知恵を覚えて帰ったのに、何故（なぜ）かその日のことが強く脳裏に刻みつけられてはなれない。

（注）○尋常科の一年生――現在の小学校一年生。
○羽二重――羽織地や礼服地用のなめらかでつやのある上質の絹織物。
○匡子――折笠先生の娘。

問１　傍線部Ａ「私たちはその白い道を乾ききって歩いて行った。」とあるが、「乾ききって」はどのような表現効果をねらったものか。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選べ。

①　「乾ききって」は、後の「氷水屋もラムネ屋も見つけることが出来なかった。」という表現と照応して、炎天下を歩く私たちのたえがたいのどの乾きを強調している。

②　「乾ききって」は、「乾き上がって」いる炎天下の道という表現と照応して、目的地に早く到達しようとほこりの立つ長

い道のりをひたすら歩む私たちの焦燥感を強調している。
③「乾ききって」は、砂ぼこりが下駄の底に吸いつきそうなほど「乾き上がって」いる白い道という表現と照応して、炎天下を歩かなければならない私たちの悲しさを強調している。
④「乾ききって」は、「乾き上がって」いる白い道という表現と照応して、炎天下の乾いた道を歩く私たちののどの乾きだけでなく、うんざりした気持ちや疲労感を強調している。
⑤「乾ききって」は、「乾き上がって」いる道という表現と照応して、炎天下の白い道を汗とほこりにまみれながら歩く私たちの当惑したみじめな気持ちを強調している。

問２　傍線部Ｂ「私がその嫌悪の様子を露骨にしてみせる程、祖母や、そして母も、私をたしなめながら喜ぶことを私は知っていた。」とあるが、「私」はどのような少年だったと思われるか。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選べ。
①　祖母や母の態度から、大人のエゴイズムを感じとって鋭く反発する、純真で正義感の強い少年。
②　祖母や母の態度から、大人の本音と建て前は違うものだと見ぬいて敏感に反応する、早熟な少年。
③　祖母や母の態度から、本音と建て前を巧みに使い分ける大人の偽善を感じて失望する、繊細な少年。
④　祖母や母の態度から、自分に対する大人たちの深い愛情を感じとらずにはいられない、心やさしい少年。
⑤　祖母や母の態度から、大人の身勝手さに反発しながらも大人に理解を示す、冷静で賢い少年。

問３　傍線部Ｃ「もう少しどうにかならないものかと思っていた。」とあるが、その時の「私」の気持ちはどのようなものだったのか。最も適当なものを、次のうちから一つ選べ。
①　いなかの子供たちに揶揄される、はでいかにも都会的な服装や恰好と、それを何とも思っていないような妹を、いらだたしく思っていた。
②　自分のはでな縞模様のシャツを誇る気持ちから、自分のと同じ生地の悪趣味な服を好んで着たがる妹を、荷厄介な付属物のように思っていた。

③　都会的な恰好をしていなかの子供たちの揶揄の的になり、自分の醜さにも気付かない妹を、ひどく哀れに思い、どうにかしてやりたいと思っていた。

④　反発しながらもみとめている妹の本当の美しさに対する恥じらいから、洗練された都会的な妹の服装を、かえってはででみっともないものと思っていた。

⑤　醜いと思う妹と一緒に歩くことをきらう気持ちから、いつもは気にならなかった妹の都会的な服装を、はででみっともないものと思っていた。

問４　この文章は、少年だった「私」のどのような体験を描いたものか。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選べ。

①　母の話とは違って幸福そうな折笠先生の姿に予想がはぐらかされた上に、先生の娘の匡子が美しくもなくひねくれて見えるのに失望したという体験を、鋭い感受性を通して描いている。

②　常に母や祖母の期待通りに演技する少年が、眠っている自分を抱き上げて無心な美しさを詠嘆した純粋な折笠先生に対しても無邪気さを装ってしまったという体験を、反省をまじえて描いている。

③　母の話から折笠先生夫妻に不幸のかげりをかぎつけようとしていたが、結局、それは母のこしらえごとであったと悟って落胆しながらも、救済されたという体験を、ドラマチックに描いている。

④　折笠先生が不幸な人だということは、思い込みにすぎないと悟ったにもかかわらず、先生とその家にまつわるどこか暗い印象がぬぐいきれなかったという体験を、鋭い感受性を通して描いている。

⑤　母の話から大人の世界を理解できたと確信していた少年が、折笠先生の幸福な現実を見て動揺し、こしらえごとを語ってきた母に対する不信と憎悪の念を抱いた体験を、淡々と描いている。

第六講　知識モノ解説

文学史・人物解説

●島尾敏雄＝しまお　としお（一九一七〜一九八六）神奈川県生まれ、九州帝国大学・法文学部卒。

語句

尋常科＝じんじょうか↓尋常小学校・旧制の小学校／尋常は「普通」の意味
あんばい＝塩梅・按配・案配↓物事の様子・具合・調子
縁故＝えんこ↓血縁などのつながり
いきさつ＝経緯（「けいい」とも読む）・そこにいたる背景・因果の糸・緯は横糸、経は縦糸の意味
たしなめる＝軽くしかる・おだやかに注意する　cf たしなむ＝心得がある・親しむ・つつしむなどの意味
反物＝たんもの↓和服の生地
歴然＝れきぜん↓はっきり
揶揄＝やゆ↓からかいや皮肉
肩身の狭い＝かたみのせまい↓恥ずかしく引け目を感じる　cf 肩肘（かたひじ）張（は）らない＝堅苦（かたくる）しくない
荷厄介＝にやっかい↓厄介と同じ・手間がかかって面倒
折悪しく＝おりあしく↓タイミングわるく
たたずまい↓様子や醸し出す雰囲気
名状しがたい＝めいじょうしがたい↓言葉では表現しにくい・いわく言い難い
憂愁＝ゆうしゅう↓もの悲しい雰囲気

羞恥＝しゅうち→恥ずかしいという感情

　同音異義語　周知＝広く知れ渡っている　衆知＝多くの人々の知恵

屍＝しかばね→死体・死骸

鄙びた＝ひなびた→いなかっぽい

狸寝　狸寝入り＝眠ったふりをする

わななかせる＝ふるわせる・おののく・戦慄（せんりつ）

無心＝むしん→無邪気・無垢／「無心する」には遠慮なく金品をねだるの意味もある

詠嘆＝えいたん→感動・感動を声に出すこと

おしゃま＝通常は、女の子のませた様子ですが、本文では、大人しくしているという意味　cf借りてきた猫

勘定＝かんじょう→計算・貸し借りの計算。本文では、相手に対して悪いな、申し訳ないという感情を心の借金として表現しています

復習問題　第六講

次の傍線部にあたる漢字を、次の選択肢から選びなさい。

（ア）夏期休カの到来を待ちわびる　①科　②暇　③過　④課　⑤禍

（イ）キ車の線路沿いを歩く　①気　②軌　③騎　④汽　⑤貴

（ウ）教員のイ安会に出席する　①易　②居　③慰　④医　⑤偉

（エ）厄カイな問題を解決する　①怪　②晦　③回　④戒　⑤介

（オ）人心の荒ハイに抵抗する　①輩　②灰　③敗　④排　⑤廃

次の語句の意味として最も適当なものを、次の選択肢から選びなさい。

（カ）名状しがたい
①実体なく名ばかりの　②有名とは言えない　③言葉で表現できない
④他者から承認されない　⑤確かに思い出せない

（キ）無心
①純真無垢な心　②無意識の状態　③前後不覚の状態
④欲求欲望の強い　⑤社会について無関心

（ク）億劫
①遠慮がち　②意地をはる　③思慮深い
④面倒くさい　⑤体裁を繕（つくろ）う

第六講　《小説その2》　母親と子供の対比

《本文の対比構造》

主役＝「私」
現実の世界と母親の影響
との間で揺らぐ心

「あれ、こんな人だったのかしらん」
「ちぐはぐな気持ち」
「私ははぐらかされていた」
「私の戸惑い」

主な対比

比較相手＝母親・祖母
母のこしらえごとの世界

物語めいた生活・固定観念
＝折笠先生は不幸な人・生ける屍
「やっぱりそうだったのだ」

小さな対比

妹

荷厄介な存在
「もう少しどうにかならないものか」

《解説》

問１《傍線部説明・選択肢》

「乾ききって」は単なる天候気象レベルの物理的なものではありません。身体的なのどの調子、生理作用だけでもありません。「嫌悪」「いやなおつとめ」「うんざりした気持ち」とセットになった心理的なものの表現でもあります。小説ですからね、登場人物の心理描写を中心にします。入試もそこを問うてきます。ただし、気を付けるべきは、その心理についてみなさんが想像して補ったり、登場人物に共感しないと解答できないというものでは、決してありません。心理を問うてはいても、心理学や想像力のテストではなく、現代日本語の試験ですからね。したがって、そうした心理は、ちゃんと本文中に書いてあるわけです。というわけで、書いてあったことに照らして④が正解です。「のどの乾きだけでなく、うんざりした気持ちや疲労感を強調」は、しびれます！　パーフェクトですね。他の選択肢のほとんどが物理的生理的レベルに集中した表現になっていて×です。まず①は「たえがたいのどの乾きを強調」でとどまってますね。水筒を持参すればよかったね、というレベルの物理的スリカエの誤りです。③は「炎天下を歩かなければならない私たちの悲しさを強調」が不十分です。「悲しさ」という心理を表現しているようでいても「炎天下」に由来するものとして書かれてますから、これも物理的スリカエの誤りです。「いやなおつとめ」だったという心理を書かないとね。⑤は、「汗とほこりにまみれながら歩く私たちの当惑したみじめな気持ちを強調」が不十分です。これまた「当惑したみじめな気持ち」と心理を語っているように見えてそれが「汗とほこり」に由来するものとして物理レベルで終わっています。ウェットティッシュをもってくればよかったね（速乾、サラサラパウダー入りとかね）という次元の、物理的スリカエの誤りです。②は「目的地に早く到達しよう」が×です。行きたくないんですから。これは普通に記述に反する誤りです。

問２《傍線部説明・選択肢》

ここでは「たしなめながら喜ぶ」という大人の二重性が大事です。〝親戚付き合いなのだから、父方であれ、母方であれ、大事にしないとね〟というのは建て前で、本音では〝そうそう、父方の親戚はいやなひとが多いよね〟なんて感じでしょう。一方、主人公の「私」はちゃんとそれを「知っていた」というわけです。鋭い目、鋭い感受性ですね。こういうことから②が正解です。

③は、「本音と建て前」はＯＫですが、「偽善を感じて失望」が×です。〝偽善←→本当の善＝「私」〟という対比は本文にはありません。正しい対比喪失の誤りです。①は「大人のエゴイズム」が、④は「大人たちの深い愛情」が、⑤は「大人の身勝手さ」が、それぞれ×です。正しくは大人の二重性なのですから、それを一面的に表す単語でまとめては、記述に反すると言えます。さらに①は、「大人＝エゴイズム←→少年＝純真で正義感」が正しい対比喪失の誤りです。

問３《傍線部説明・選択肢》

「どうにかならないものか」は、妹への否定的な表現です。「私は自分の妹を醜いと思い」や「彼女の気安げな大胆さを低能のせいにしていた」「彼女がいつまでも私の為には荷厄介な付属物のように此の世の中にあって私の傍にくっついて邪魔をしているように思っていた」とありますからね。したがって、①が正解です。③は「どうにかしてやりたい」が×です。これでは妹への応援です。〝お兄ちゃんがメイク指導してあげるよ〟とか〝ファッション誌を買ってあげるよ〟ってな感じかな。余計なお世話ですよね。ともあれ、ネガティブ評価にするところをポジティブ評価にしてしまいましたから、記述に反する誤りです。あるいは文脈喪失の誤りと言ってもよいでしょう。また「自分の醜さにも気付かない妹」も×。気付かないのは「私」です。正確には、妹の「美しさ」に「気付か」ないのは「私」です。はい、ここも記述に反する誤りです。「私」と「妹」のとりちがえという点では、対比混乱の誤りとも言えます。④は「妹の本当の美しさに対する恥じらい」が×ですね。〝いもうと萌え〟かよ！「美しさに気付くことが出来なかった。彼女のえくぼさえ私は醜く思った」が本文ですからね。記述に反する誤りです。いやー楽しい間違いだよね。この試験をつくっている人、楽しんで作っているよね。こちらも楽しんで解きましょう。②は「自分のと同じ〜服を好んで着たがる妹」が×です。今度は〝お兄ちゃん好きの妹〟〝兄萌え〟になってます。かわいいけど×だよ。服については「着なければならなかった」です。また「母から用意されていたもの」で、しかも「祖母は私たちにそれを着ることを強く要求」ですからね。記述に反する誤りです。⑤は「いつもは気にならなかった」がしらじらしーい×。正しくは「いつものことながら」「いつまでも」ですよ。記述に反する誤りです。

問４《全文理解・選択肢》

お母さんによる、ある種の刷り込み、固定観念つまり、「折笠先生は不幸な人」「生ける屍（子どもに言われたくない！）」からスタートし、実際の折笠先生宅への訪問で、その固定観念が揺らぎます。さらに「私の母がこしらえあげた物語めいた生活など、此の世の中にありはしなかった。私はそういう知恵を覚えて帰った」という変化に至ります。ところが、もうひとひねりあって、「何故かその日のことが強く脳裏に刻みつけられてはなれない」で結末です。それほどお母さんの影響力は、こんな賢い子どもにも強いものなのですね。したがって、④が正解です。①は、まず「幸福そうな折笠先生」に疑問符が付きます。「かげり」「荒廃の気配」「不幸な人の面影」がない、と書いてあるだけですから。また、本文のメインの対比からすれば枝葉（えだは）、枝葉末節（しようまっせつ）部分にすぎない（《本文の対比構造》に入ってない）「先生の娘」についての「失望」を大きな主題みたいに書いているため×です。匡子への「失望」は確かに本文中にありますが、先にも書いた通り枝葉末節的な部分です。部分的指摘の誤りとも正しい対比喪失の誤りとも言えます。②は、「演技」と「反省」という対比になってますが、もちろん正しい対比喪失の誤りです。そもそも「私」＝「少年」のキャラクター設定は〝良い子ぶりっ子〟ではありません。また「常に〜演技」が不当な全称判断です。こういう〝すべての・あらゆる・いつでも・どこでも〟と選択肢にあったら気を付けましょう。③は「ドラマチックに描いている」がはっきり、記述に反する誤りです。本文によれば「母がこしらえあげた物語めいた生活など、此の世の中にありはしなかった」ですよ。ドラマはなかった、です。⑤は、まず「母の話から大人の世界を理解できた」が×。母の話は「折笠先生は不幸な人」という固定観念をつくったのでしたね。記述に反する誤りです。また「幸福」は、①と同様に疑問です。さらに決定的に間違いなのは「母に対する不信と憎悪の念」です。怖いです。母親による固定イメージからなかなか解放されないということにすぎません。リベンジを誓っちゃいけませんね。記述に反する誤りですね。

模範解答

問１＝④　問２＝②　問３＝①　問４＝④

復習問題　解答　第六講

（ア）②　（イ）④　（ウ）③　（エ）⑤　（オ）⑤

（カ）③　（キ）①　（ク）④

解答漢字一覧

（ア）休暇　（イ）汽車　（ウ）慰安会　（エ）厄介　（オ）荒廃